

薬だつ知識

69

漢方薬は、複数の生薬の組み合わせから成っており、処方構成の理論として「君・臣・佐・使」というものがあります。その役割から①病を治す主役（君主）の「君薬」②君薬を補佐協力して、その効能を強化する「臣薬」③君薬・臣薬を補佐し、副作用を防ぐ「佐薬」④諸薬の調和をはかる「使薬」に分類されます。

一例を挙げると、初期の風邪で服用されることが多い葛根湯の処方「葛根（君薬）」「麻黄（臣薬）」「桂枝・芍薬（佐薬）」「甘草・生姜・大枣（使薬）」となります。また、個々の生薬は、それぞれの漢方処方の生薬構成によってその役割や働きの特徴を変えます。

漢方の処方



左から麻黄、桂皮、杏仁、甘草

例えば「麻黄」は葛根湯の中では主役ではなく臣薬として働きますが、麻黄湯においては主役の君薬として働き、「麻黄（君薬）」「桂枝（臣薬）」「杏仁（佐薬）」「甘草（使薬）」となります。甘草は、多くの処方に含まれ、そのほとんどは「使薬」として働くことが

多い生薬です。しかし、芍薬甘草湯や甘草湯の中では、切迫した症状を治す「君薬」として主役の働きをします。このように漢方処方中の生薬は、君臣佐使の法則に従って配合され、一緒に配合される生薬の特徴を引き出し合うように協力し合って働いています。

生薬は主に草の根や木の皮、植物の種子などを加工したものです。単一の成分のみを含むのではなく、複数の成分を有しており、またすべての成分が解明されている訳ではありません。

ひとつの生薬の中にも異なる複数の成分や特徴がありますが、それぞれの生薬が自身の特徴を主張し合うのではなく、各処方の中で、チーム（一緒に配合される生薬）によって、その時々で自身の役割や作用の強弱を変え、柔軟にその個性を発揮し、バランスの取れたチームプレーを行っていると考えるのです。

（鹿児島県薬剤師会常務理事・沼田真由美）

※第1水曜に掲載します。

生薬のチームプレー!?

令和5年7月5日（水）

69. 漢方の処方